

原爆文学研究会報

第一四号

原爆文学研究会 二〇〇五年六月

こさえもの 今村昌平監督『黒い雨』を見ました。原作は井伏鱒二です。が、改めて見るとこの映画には、小説『黒い雨』の他にもいろいろな井伏作品が織り込まれています。車のエンジン音を聞きたびに敵軍の襲撃だと思つて発作を起こす復員の悠一は『遙拝隊長』にいましたし、動かないバスを乗客みんなでヨイシヨイシヨと押すのは『乗合自動車』で見かけた場面だなあ、といった具合です。また池本屋のおぼはんはあいかわらさず「けつまがり」ですが、彼女の身持ちの悪さまでは原作に描かれていません。今村監督は原作をずいぶん改造しています。ちなみに井伏鱒二も、『黒い雨』執筆にあたって大量の一次資料や被爆者の証言を駆使しましたが、死体を焼く場面などは「たまらないから」、ピノキオのたとえ話という「こさえもの」をあえて使つたのだそうです。

何かを表現し、誰かに伝えようとするとき、こさえることは必要です。なぜならそこには、伝えられる側の千差万別な「容量」が存在するからです。そこへうんと歩み寄るために「こさえもの」をいかに利用するか……そのテクニクは、映画や小説の世界ではすでに常識のようです。

元ひめゆり学徒の語り部の話を「退屈」だと感じた、という感想文が今春、ある私立高校の英語の入試問題で使われ、語り部関係者は憤りました。でも彼女らは、何に對してそんなに怒りを覚えたのか。「退屈」という感想そのものに？ それとも、そんな感想の存在

を伏せなかつた高校側の無配慮に？
とかく〈伝え方〉が問われる戦後六十年においてとても大切な問題ですが、そのあたりはなぜか新聞もニュースも、残念ながら詳しく伝えてくれません。
(内田 友子)

第一四回 原爆文学研究会報告

二〇〇五年四月二日(土) プラザホテル寿(山口市湯田温泉三三三ー一三)で開催した「第一四回原爆文学研究会」には約二〇名が集いました。

中原氏の発表については、「(原爆詩人)というレッテルの背景にどのような力学が働いているのか」「戦中の〈戦争詩〉と〈原爆詩〉とはどのように接続していると考えられるか」等の質疑がありました。

波瀾氏の発表については、「万博を、ある〈挫折〉の体験と見る場合、安部公房にどう関わるのか」「万博によつて隠蔽されたものに注目するとき、原爆とはどのような関係を見いだすことができるのか」等についての質疑がありました。



◇ 研究発表 1

原口喜久也——「原爆詩人」の生成

中原 豊

いわゆる「原爆詩人」としてのみ評価されがちな原口喜久也であるが、はたして原口は最初から「原爆詩人」であったのか。その文学活動の足跡をたどってみると、原口がある種の時代的な必然性によつて「原爆詩人」としての道を歩んだ（歩まされた）という側面が浮上してくる。そういった側面を「文学広場」という雑誌における原口の活動を通して示してみたい。

「文学広場」は昭和28年5月に創刊された教職員関係者の文芸総合雑誌で、創作、詩、短歌、俳句、童話等の投稿が主体の、著名作家の指導による文芸活動の場であり、美術・音楽・演劇等も含む文芸入門誌かつ教育関係の情報誌であった。詩の投稿欄はかつての四季派の詩人阪本越郎が選者を担当していた。中学校の国語教員であった原口はその詩壇に昭和29年から自死の前年まで投稿を続けており、昭和34年4月には前年度の年度賞を受賞する程の活躍ぶりであった。昭和33年の『さんかく座星雲』や翌年の『スタンドGLASS』はいずれも合同詩集であるが、その詩友たちも「文学広場」を通じて知り合った仲間であったし、単独の詩集である『ふにくり・ふにくら』や『現代のカルテ』（没後の刊行）にも、阪本越郎によつて「文学広場」の詩壇に選出された詩が数多く収録されている。

原口の詩が「文学広場」の詩壇に取り上げられるのは昭和29年からであるが、当初は教員としての経歴を生かしたモチーフの詩ばかりであり、第五福竜丸事件や翌年の第一回原水爆禁止世界大会の開

催といった社会的な動きの反映は見あたらない。昭和32年4月に特選に選出された「原爆の駅」浦上²以降、長崎の被爆をモチーフとした詩が多くなり、選者阪本越郎の高評価も手伝つて、原爆は原口の詩のライトモチーフを形成するようになり、後の「原爆詩人」としての評価の基礎を形成していく。

昭和37年に骨肉腫と診断されてから、原口は次第に健康を失つていくが、なおも詩作を続ける。実際は復員後の入市被爆であったわけだが、そうした区別は大きく取り上げられることなく、「文芸広場」を中心とした詩壇では「原爆詩人」としての地位を確立していく。

昭和38年3月14日、原口は長崎市の国際文化会館の原爆資料陳列室のある四階で縊死を遂げる。その死が「原爆詩人」としての評価を確立するのに大きな影響を持ったのは確かである。原口喜久也は「原爆詩人」としての死を自ら演出したというべき側面を指摘しなくてはならないし、そうした評価を無反省に繰り返していた阪本越郎らとの一種の意図せぬ共犯関係をも指摘しておかなくてはならないと思われる。

阪本越郎は、戦前においてはいわゆる愛国詩を唱道し、戦後は多くの詩学の内容を持つ啓蒙書において、戦前からの抒情詩の評価に大きな役割を果たしていた人物である。そこに戦前、戦中、戦後を見通す、詩の抒情と政治との深い関連性を見いだす可能性があると考ええる。

原爆と万博と文学

波瀾 剛

安部公房は、長編小説『他人の顔』（一九六四年）、『方舟さくら丸』（一九八四年）で原爆の問題を扱っています。私が興味をもったのは、それらが一九六〇年代と一九八〇年代に書かれていたという点です。一九六〇年代、安部公房は勅使河原宏とともに自作の映画化を試みています。そのなかでも、『他人の顔』（一九六六年）では、小説のときよりも原爆の問題を扱う分量が増え、かなりの脚色がなされています。だとすれば共同製作者勅使河原宏もまた、この時期、原爆の問題に興味を持っていたと考えられます。

一九六〇年代後半における原爆への関心は、さらに大阪万博へとたどりつきました。その契機となったのは、安部公房と勅使河原宏が、自動車館の『一日二四〇時間』という映画を製作したことにありますが、調査の過程で、万博記念のタイムカプセルに納められた二〇〇〇余点の資料のなかに井伏鱒二の小説『黒い雨』があったこと、さらには、原爆に関する展示が当初は計画されていたにもかかわらず撤去されたという事実も知りました。

そこで、大阪万博と原爆とのかわりについて調べてみました。すると、そもそも万博の基本コンセプトを立ち上げた建築家浅田孝にとって、原爆体験が非常に重要なできごとであることが分かってきました（榎木野衣『戦争と万博』美術出版社、二〇〇五年）。また、開催段階におけるプロデューサーであった岡本太郎についても、「爆発」というキーワ

ードをふくめて原爆との浅からぬ縁を感じるようになりました。

こうした点をふまえて安部公房について再度視点を戻すとき、安部が「自殺」ということばと結びつけて「水爆」や「核」について語ろうとすることが特徴的であるように思えてきました。人類全体の「自殺」の手段という見方。では安部のこうした見方をどのようにとらえるべきなのか。発表ではその答えを提示するまでには至らず、思考のプロセスそのものを吐露するというような稚拙なものになってしまいました。

それに対して、発表後のコメントはとても刺激的で、「人類」という用語のとらえ方や、「廃墟」のイメージに関する意見、一九六〇年代における原爆と万博との結びつきに関する意見をいただきました。私の散漫な発表はそれらのコメントによってようやく有機的に結びいたというのが実感です。いま思い出しても恥ずかしい発表です。温かく見守っていただいた参加者のみなさんにたいへん感謝しています。



中原 豊 氏



波瀾 剛 氏

彙報

第一四回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇五年四月二日(土) 一三時より
- 会場 プラザホテル寿(山口市湯田温泉三三三―一三)
- 内容 研究発表

原口喜久也―原爆詩人の生成

中原豊

原爆と万博と文学

波瀲剛

機関誌「原爆文学研究」第四号原稿募集

本研究会が年に一回発行している「原爆文学研究」第四号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載することとします。奮ってご投稿下さい。

記

- 書式 縦書き、三〇字×二四行、二段組。
- 投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇〇五年六月中旬、データファイル(Word か一太郎)を添付しての投稿の場合は六月末日。
- 発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一、〇〇〇円を発行経費として負担する。
- 投稿宛先 原爆文学研究会事務局(住所・連絡先は会報末)。データファイルの場合はプリントアウト原稿を添えて郵送して下さい。

編集後記

最近、戦後六〇年ということを意識してか、原爆に関する新刊書が多く出版されている。書店で手に取ることが出来る場合は、ぱらぱらと頁を繰り、「これは買いた！」と感じられるものは、購入している。そのような取捨選択を行っても、次々に買物は増えている。手に取っただけで、作りの思いが感じられる本が多いことだろう。置き場には困るのだけれども、大変ありがたいことだと思ふ。

この夏、本研究会が発行する「原爆文学研究」第四号も、それ勝手に取った人々に熱を伝えられるような雑誌に仕上がれば良いと思ふ。熱だけでもいけないのはもちろんだが…。

書く、ということを通じてしか、向き合うことができない問題があるのだ、と自分を叱咤しつつ――

皆様からのご投稿、お待ちしております。

(N)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一一―六五二〇 福岡市中央区六本松四―二―一

九州大学大学院比較社会文化研究院 石川巧研究室内

tel/fax 092-726-4595 e-mail ishikawa@scs.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>